

---

# 空色のバス

夏目真七

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

空色のバス

### 【Zコード】

N9412M

### 【作者名】

夏目真七

### 【あらすじ】

謎の空色のバスの行き先とは・・・？

空色のバスが目の前に止まつたら、なんにも持たずにそれに乗ろう。切符もお金もいらない水色のバスは、どこからともなく走つてくる。そして目の前に止まつたかと思ったら、ショーッという音を立てて扉を開けるのだ。

夏の日の炎天下、一際目立つ鮮やかなバスがコンクリート道路を走つていた。

夕陽が沈む頃に川辺を歩いていると、川を繋ぐ高速道路と歩道がある橋の上に黒い人ばかりが見えた。

皆黒や灰色のロングコートや帽子で身体を覆い、どこか旅の列車を待つているような雰囲気で、僕は気になつて近づいてみる。

二列縦隊で10列ほどの行列は、皆顔が見えず影のように佇んでいる。

一番後ろに並んでいる、大きな鞄を持った紳士に声をかけた。

「なにをしているんですか？」

「バスを待つてているんだよ」

「バス・・・？」

「あの夕陽が沈む直前が、バスの停車時刻なんだ」

そう言つて、遠くに見える黒いシルエットの上に浮かぶオレンジを

指差した。

溢れんばかりの夕陽が空や雲、街、水面、僕達を、惜しみなく照らしている。

こんなに綺麗な夕陽を見たことが無かった。

「おじさんはどこに行くんですか？」

「遠い場所さ。あの夕陽を日指す人もいれば、月の花が咲く場所にも行ける。」

世界の果てに行くのや」

(後書き)

解説しますと（いらないかもですが）、  
黒い人だかりは葬列です。

つまりまあ、みんな死人で、バスが魂をあの世へ運ぶ役割ということです。

この少年は自分が死んだことに気づかないまま、この後バスに乗つて自分の行くべきところへ行くわけですね。（たぶん）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9412m/>

---

空色のバス

2010年10月13日04時33分発行